

随筆

アメリカ・メキシコ駐在記

奥村 哲也

1. はじめに

2008年2月から2016年1月までの8年間に渡ってアメリカとメキシコでの駐在生活を経験した。

アメリカ駐在はKYB Manufacturing North America (以下KMNA) から現在のKYB Americas Corporation (以下KAC) に変わる間の5年8か月、メキシコはKYB Mexico S.A. de C.V. (以下KMEX) の立ち上げから2年3か月間の駐在であった。

妻と一人娘、愛犬と共に家族帯同で駐在を始めたが、娘は中学二年生から高校卒業までをインディアナで過ごし、大学で日本に戻るため先に帰国した。駐在を通じて家族と共に貴重な経験をさせて頂いたため、その一部を紹介する。

2. KYB Manufacturing North America (KMNA)

駐在を始めた2008年当時は、サブプライム住宅ローン危機に端を発して資産価値の暴落が起こった、いわゆるリーマンショックの時であった。KMNAは赤字が続いており、経営は厳しい状況にあった。それに追い打ちを掛けるように売上は減少し続け、リーマンショック前の半分にまで落ち込んだ月もあった。従業員も駐在員も減少の一途を辿り、資金調達においても地元の銀行は貸し剥がしを行い、他の米系銀行も新規貸付を受け付けない。唯一、KYBのメインバンクのみが借入枠の増枠に応じてくれたため、小切手等全ての取引をこの銀行に移し資金を確保できた。また、先が見えない状況であった2008年度には固定資産の減損も行ったため、最悪の決算となった。

2008年度はこのような状況にあったが、徹底的なコスト削減を行い、売上も徐々に増え、翌2009年度には黒字化を達成することが出来た。

3. KYB Americas Corporation (KAC)

2011年10月、KMNAはシカゴの販売会社KYB America LLCを吸収合併し、製造会社と販売会社

がひとつの会社となり、社名がKYB Americas Corporationとなった。合併に伴い経理部門はインディアナに集約するため、人財の採用とシカゴでの引継に奔走した。

2012年には工場に隣接するDaily Journalという新聞社の土地と建物を買収し、事務所を移転することになった。最初に開発部門と経理部門のみが移動したのだが、買収後もしばらくは建物の半分を新聞社が使っており、壁を隔てて新聞社と同居しながら仕事をしていた。現在はほとんどの事務部門が移動し、米州統括の本拠となっている（写真1）。

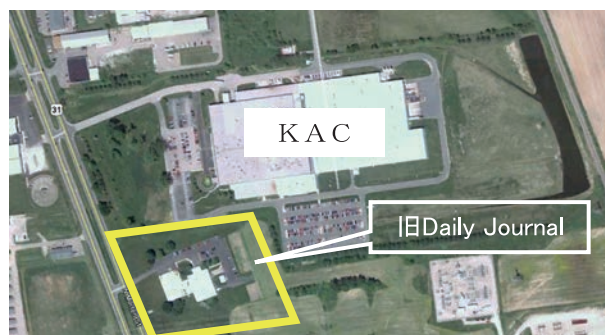


写真1 KACと旧Daily Journalの敷地

4. アメリカの自然

KACのあるインディアナ州は米国中西部に位置するため大陸性気候で、夏は35℃以上になることもあるが湿度が低いため、日陰は過ごしやすい。時折激しい雷雨を伴ったサンダーストームが発生する。遮るものが無いため遠くで鳴っていても危険であり、会社の木にも駐在期間中に数回落雷があった。駐在が始まって5か月目の2008年夏には洪水に見舞われた。道路が至る所で通行止めとなり、会社も駐車場が冠水し水没した車もあった。また、米国駐在終盤の2013年4月にはゴルフボール大の雹が会社周辺に降り、従業員の車が被害にあった。インディアナ州は比較的トルネード（竜巻）の発生が多い州としても知られており、よく警報が鳴ることがあったが幸

い遭遇したことは無い。

冬は大体零下10℃位で、寒いときには零下20℃を下回ることもある極寒の地である。屋外に居ると「寒い」というより「痛い」という方が近い感覚かも知れない。雪は年に数回積もるため通勤時には注意して運転しなければならないが、特に危険なのはフリージング・レイン（雨水）という着水性の雨が地面で凍る状況であり、道路がスケートリンクのように滑る。

このような厳しい自然環境であったが、現地の人々に助けられながら事故なく無事に過ごすことができた（写真2）。



写真2 フリージング・レインで凍った庭の木

5. KYB Mexico S.A. de C.V. (KMEX)

2012年10月KMEXが設立された。場所はメキシコのグアナファト州シラオ市の工業団地である。この工業団地は広さが20万ヘクタールあり、空港が隣接し貨物鉄道が通っている。100社強の会社が工場や倉庫を有しており半数が日系企業である。

KMEXのあるグアナファト州はメキシコ中央部に位置し、国内では6番目に人口が多い州である。主要産業は自動車や革製品を中心とする製造業で、日本企業ではマツダ様やホンダ様がそれぞれ工場を稼働させており、トヨタ様も2019年に進出予定となっている。また、隣のアグアスカリエンテス州には、日産様やジャトコ様といったお客様の工場がある立地となっている。

工場建設中は工業団地の管理ビルの一室を借りて仮事務所としており、経理処理はメキシコ首都メキシコシティにあるグループ会社の経理に委託していた。駐在前はインディアナからメキシコシティに出張し、帳簿のチェックや報告資料の作成を行っていた。

2013年10月、メキシコ駐在が始まった。ビザは、インディアナのメキシコ領事館で仮ビザが発給され、メキシコシティの移民局で本ビザが発給されるため、日本に帰ることなく駐在手続きが完了した。

2014年3月に仮事務所から工場に移動し、無段変

速機（以下CVT）用ポンプの生産準備に入った。事務所がまだ工事中であったため、仮の部屋に机を並べた（写真3）。



写真3 工事中のKMEX事務所

2014年5月末にお客様、州知事、市長、取引先様を招待してCVT用ポンプ工場の開所式を開催した。州知事が出席されるので政府により式次第が決められ、式当日は大勢の護衛を従えて来社され、スピーチを終えた後は工場裏からヘリコプターで帰られた。昼食時には、「上を向いて歩こう」や「Cielito Lindo」（日本でも知られているメキシコの歌）を従業員と駐在員で合唱する等、準備は大変であったがユニークな開所式となった（写真4、5）。



写真4 CVT用ポンプ工場開所式にて（右はグアナファト州知事）



写真5 CVT用ポンプ工場開所式翌日の新聞記事

2014年12月、メキシコやパナマにあるグループ販売のアフターマーケット業務をKMEXに移管して製販一体とした。そのため、グループ販売や弁護士等との打合せにメキシコシティに出張する機会が増えた。

メキシコシティは駐在員が住んでいるレオン市から南東に約380km強、車で4時間半程度の距離にあり、標高は2,300mで高山病にかかる出張者もいる。

余談になるが、メキシコの高速度道路は制限速度が110km/hのところが多く、飛ばしている車が多い。しかし、高速度道路を人が渡り自転車走る等、危険が沢山潜んでいる。当然事故も多く、通行止めになる程の大事故も度々起こる。出張の帰りに数キロ先の高速度道路に小型飛行機が墜落し、大渋滞に巻き込まれた経験もある。手前で休憩していなかったら遭遇していたかも知れない。

2014年12月、ショックアブソーバ（以下SA）工場の建設が始まった（写真6, 7）。KMEXの敷地は全体で13.4万㎡あり、1/4をCVT用ポンプ工場、1/2をSA工場、残りの1/4は芝生を植えて社内イベントのオープンハウス等に使っている。



写真6 SA工場鍬入れ式



写真7 建設中のSA工場

6. 世界遺産

KMEXがあるシオラ市の近くには、州都であり

世界遺産に登録されているグアナファト市がある。KYBの会社紹介ビデオにも映っている色とりどりの建物が立ち並ぶ歴史的な街である（写真8）。グアナファト市は16世紀半ばにスペイン人により築かれ、18世紀後半には世界でも有数の銀の産出地であった。グアナファト市への道は銀の坑道跡が道路となっており、非常に趣はあるが迷路のようである。この銀によってもたらされた富がメキシコを代表する大劇場であるファレス劇場（写真9）を有する文化の街をつくりあげ、メキシコ独立運動を率いた進歩的な考えを持つ人々を輩出した。

街中にはグアナファト大学があり、観光客に加えて学生の姿が目立つ。



写真8 グアナファトの街



写真9 ファレス劇場

7. メキシコ生活

駐在員が住んでいるレオン市はグアナファト州最大の都市であり、人口約140万人を有する革製品で栄えた街である。標高1,800mの高地にある。日系企業が多く進出しており、他社の駐在員家族とも交流できて生活情報を共有していた。

市内にはメキシコ料理（写真10）、スペイン料理、フランス料理、韓国料理等の美味しいレストランが



写真10 メキシコ料理の定番「タコス」

沢山あり、日本食レストランや食材店もあるため、食事には恵まれている。ただし、庶民的なレストランでは食中毒に注意が必要である。

駐在時、グアナファト州はメキシコの中でも比較的治安が良かったのだが、最近は治安悪化が報じられており残念であると共に心配でもある。駐在当時間も車上狙い等の盗難事件は頻発しており、車から離れるときは荷物を車に残さない点は留意していたが、今はそれ以上に神経を使うことが多く大変だと思う。

一般的にメキシコ人は楽観的で明るく、陽気で人懐っこくて世話好きで、その瞬間を楽しみ先の事はあまり深く考えないところがある。従業員の結婚式

に招待されたことがあるが、夕方に教会で式を挙げ、その後披露宴会場に移動して朝までテキーラを飲み、食べ、踊る。会社のクリスマスパーティーでもメキシコ独特の賑やかな音楽によって終始踊り続けている。

アメリカ人もメキシコ人も家族との時間を非常に大切にす。ほとんどの従業員は定時までには仕事を終えて帰宅する。

メキシコ人は人生を楽しく過ごす。宗教への信仰が篤いこともあるが自殺する人は極めて少ない。帰国後、毎日のように自殺のニュースを聞く度に日本人の人生観について深く考えざるを得ない。

8. おわりに

KACやKMEXと一緒に仕事をしたローカルスタッフや駐在員の皆様にいつも助けて頂き、8年間の駐在を全うできたと感謝している。紙面を借りてお礼を申し上げたい。両拠点とも駐在員のチームワークはとても良かったと思う。仕事では苦楽を共にし、週末はゴルフを楽しんでストレス発散し、8年間で非常に短く感じられた。

仕事の上でも、自分や家族の人生においても貴重な経験をさせて頂いた。

著者



奥村 哲也

1987年入社。経理本部経理部長、岐阜地区経理部門、本社経理部、アメリカ、メキシコ駐在を経て現職。